

年 次 報 告 書

2016

Annual Report 2016



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター



年 次 報 告 書
2016

Annual Report 2016

～つどう、つながる、つくりあう～



大阪大学大学院人間科学研究科
附属 **未来共創センター**

未来共創センターの主な活動内容



人間科学セミナー

人間科学研究科教員や、大学内外の研究者によるセミナー（研究講演）を、市民にも開放することで、異分野交流を発展させると共に地域との交流を深めます。



市民公開講座

研究者と市民が“つどう”を目的とした市民公開講座。講演だけでなく、教員・スタッフ・学生と市民が共に語り合う場をつくり、実践的な“つながり”を目指します。



コンポジウム

コンサートとシンポジウムを融合させたコンポジウム。教員を中心に、学部生・大学院生も参加し、音楽と講演を通して研究者と市民の学び合いの場をつくります。



サイエンスカフェ

中学生・高校生をはじめとした一般の方々と、学部生・大学院生が語り合い議論することで研究内容をわかりやすく伝え、語る、対話の場をつくります。

多様な風が交わり、協働して新しい風をつくる。

未来共創センターは、社会と大学との結節点となって社会に貢献することを目指しています。
オリジナリティあふれる多様な研究活動を、教員や学生自らが社会へ情報発信していきます。



暮らしとともにある学び



高大連携

高等学校だけでなく小中学校でも、自身の研究テーマをわかりやすく発表したり、語ったりする出張授業を、教員・学部生・大学院生との協働により実施します。



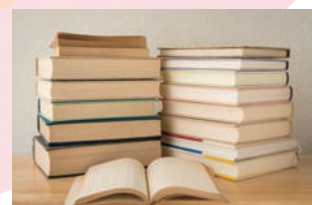
ランチトーク

昼休みに食事をしながら気楽に行う学部生・大学院生のプレゼンテーションや、哲学カフェ形式でのコミュニケーションで様々な人との“つながり”をつくります。



「私の一冊」の発行

学部1年生に読んでもらいたい本を、教員がひとり1冊ずつ紹介し、冊子にまとめました。教員と学部生が共感し話題が生まれる“きっかけ”をつくります。



「人間科学叢書」の出版

“食べる・老いる・遊ぶ・教わる”などをテーマにし、“人の暮らし”を題材に人間科学研究科の学際的な研究内容を紹介するシリーズ本を出版します。

目 次

はじめに	1
I. 組織の概要	2
1. 未来共創センター設立の経緯と背景	2
2. 活動目的と概要	3
3. 運営体制	4
II. 活動報告	5
1. 人間科学セミナー	6
2. ランチトーク	14
3. 冊子『私の一冊』の作成と配付	19
4. 高大連携	20
5. 市民公開講座	21
6. サイエンスカフェ	24
7. コンポジウム	25
8. 阪大フェスタ	26
9. 学生の活動と単位化	28

はじめに

未来共創センターの最初の1年間の活動報告を一冊の冊子としてまとめることができました。

2016年4月1日に、人間科学研究科は新しい体制に移りました。それまでの人間科学専攻とグローバル人間学専攻の2専攻から人間科学専攻の1専攻になりました。これに伴って、約2割の教員が学系を移動して、行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系の新しい学系体制になりました。この大きな体制の変革は、教員が多様に混じり合いながら、それぞれの学問分野を深めるとともに、新しい学問領域を開拓することを目指すためでした。そこで、研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、人間科学研究科と社会との結びつきも加速する目的で、附属未来共創センターが創設されました。

未来共創センターの1年目の目標は、「さまざまな出会いの場」の創出でした。そして、1年が終わり、そのような場をいくつか創出することができました。

人間科学研究科教員や外部の研究者が専門の異なる研究者や社会の一般の方々にも理解していただけるレベルで研究成果を話していただく「人間科学セミナー」、教員を講師とした「市民公開講座」、教員と大学院生らが共同で講師となって学外で開催する「サイエンスカフェ」。さらに、高校生への模擬授業だけでなく、小中学生への授業も行う「高大連携」。これらのほとんどは、教員と学部生や大学院生の協働作業として実現しました。コンサートとシンポジウムを組み合わせた「コンポジウム」は講師も聴衆も歌い、感じ、そして、話を聞き、考えるという複合的で、しかも、すべての出席者が参加する新しいタイプの連携を目指しました。また、大学院生が昼食をとりながら、研究を語り合う「ランチトーク」も開始しました。改組を機会に新しくなった1年生の必修科目『人間科学概論』の中で、人科教員が1年生に読んでほしい本の紹介文を一人一冊執筆し、まとめた『私の一冊』を配付し、大学院生が1年生に「私の人間科学」を語る機会も作りました。このほかにも、人間科学叢書の出版を目指した企画も進めました。

これらのほとんどの取り組みは、大学院生の参加や複数の教員の新しい組み合わせや出会いの場の創出につながったはずです。多様な出会い、連携が人間科学研究科の教員や学生の研究活動の新たな展開に結びつき、そして、社会と大学の双方向の関わりにも少しは結びついたのではないかと考えています。人間科学研究科内、そして、人間科学研究科と社会との結節点としての役割を担った未来共創センターへのこの1年間のご支援に感謝するとともに、今後のさらなるご支援、ご協力をお願いいたします。

未来共創センター長 中道 正之

I. 組織の概要

1 未来共創センター設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（4学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と2007年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（1学系：グローバル人間学系）の2専攻5学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そのために、新しい枠組みが必要であると、私たちは結論しました。

そこで、本研究科では従来の2専攻5学系体制から、1専攻4学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻（行動学系、社会学系、人間学系、教育学系の4学系）とグローバル人間学専攻（グローバル人間学系の1学系）の2専攻を、人間科学専攻（行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系）の1専攻にしました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」の開拓を目指して、従来の5学系の教員が参集して「共生学系」を創設しました。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、今回の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」を新たに設置しました。

2 活動目的と概要

【活動目的】

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーやサイエンスカフェ、さらに学術図書の企画・出版、国内外での課外活動とインターンシップ等の事業に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に着けることが期待できます。さらに、本センターの多様な活動を、高校生や地域住民の方々に対しても発信し、高大連携と社会学連携の発展に貢献します。

【活動概要】

- 1、人間科学セミナー：人間科学研究科教員を中心に、大学内外の研究者による研究講演を、市民にも開放して実施する。
- 2、市民公開講座の企画、運営：人間科学研究科教員を中心に、学内外の研究者と市民を結ぶ場を創る市民公開講座を 1 回実施する。なお、教員からの一方的な講演だけでなく、講演終了後に、講演した教員、スタッフ、学生、市民らとの歓談の場を設け、実践的な交流を目指す。
- 3、サイエンスカフェの企画、運営：人間科学研究科教員と大学院生・学部生が協働し、箕面市国際交流協会等とも連携をとり、中・高校生と保護者や一般の方々に研究をわかりやすく語り、対話する場をつくる。
- 4、小・中・高大連携の活動：人間科学研究科教員、大学院生、学部生との協働で、小・中・高校生に自身の研究をわかりやすく伝える。
- 5、大学院生と学部生によるランチトーク：サイエンスカフェの研究科内版。昼休みに、食事をしながら、大学院生と学部生が研究内容を語る。専門分野内の会話ではなく、専門外の人に語り、質問することを、気楽に楽しむ場。
- 6、コンポジウム：「コンサート」と「シンポジウム」を合わせた造語。人間科学研究科教員を中心に、学部・大学院生も補助的に加わり、音楽と講演を通して、研究者と市民の学び合いの場を提供する。

- 7、『私の1冊』：人間科学研究科教員が学部1年生に読んでほしい本や教員自身が著わした本についての説明文を1冊の冊子にまとめる。
- 8、学術図書の企画・編集・出版：「食べる」「老いる」「遊ぶ」「教える」などの人の暮らしをタイトルにして、人間科学研究科の学際的な研究内容を高校生以上の読者を対象に紹介するシリーズ本の出版。

3 運営体制

○未来共創センター構成員

・未来共創センター

中道 正之 教授
岡田 千あき 准教授
鈴木 広和 准教授
Don Bysouth 准教授
孫 美幸 講師

渥美 公秀 教授（兼）
白川 千尋 教授（兼）
前迫 孝憲 教授（兼）
山中 浩司 教授（兼）
岡部 美香 准教授（兼）

国際交流室

Scott North 教授 [室長]
安元 佐織 講師
藤田 直生 事務補佐員

学生支援室

吉川 徹 教授 [室長]
前馬 優策 講師
堺屋 真紀 事務補佐員

サイバーメディア室

前迫 孝憲 教授 [室長]
宮本 友介 助教
Spence Zaorski 助教
久保 喬義 事務補佐員

Ⅱ. 活動報告

未来共創センター 平成 28 年度 活動概要

①人間科学セミナー・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8 回実施延べ 635 名参加

5月26日	『『かわいい』の実験心理学 ―素朴な興味を研究に、そして社会へ― (入戸野 宏 教授)
7月21日	「共生社会の構築に向けた アクションリサーチ」(稲場 圭信 教授)
10月27日	「地球を考える：『人新世』における新しい学問分野の連携に向けて」 ※英語講演 (Casper Bruun Jensen 特任准教授)
11月17日	「不可視のリスクに起因する不安のコミュニケーションをどう捉えるべきか ーリスク社会における課題と未来への展望ー」(三好 恵真子 教授)
12月 5日	「調整の進化」※英語講演 (Sarah F. Brosnan ジョージア州立大学准教授)
2月15日	「行動生理学とともに」(志村 剛 教授)
2月17日	「だれひとり取り残さない国際保健医療をめざして」(中村 安秀 教授)
3月 8日	「第二の近代における社会学理論の可能性」(友枝 敏雄 教授)

②ランチトーク

(大学院生、学生による研究発表、意見交換：インターナショナルカフェ)・・・・・・ 8 回実施

③高大連携

(高校での模擬授業など。教員だけでなく、学生も参加。小、中学校でも実施)・・・・・・ 16 回実施 (センターが対応したもののみ)

④市民公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 回実施 66 名参加

3月11日「想いをはせる」：キャノピーホール

(講師：臼井 伸之介 教授・吉川 徹 教授・千葉 泉 教授・岡部 美香 准教授、ゲスト：山中 浩司 教授)

⑤サイエンスカフェ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 回実施 12 名参加

1月29日「21世紀の子どもたちの行方」：箕面市多文化交流センター (山中 浩司 教授)

⑥人間科学叢書 (2017 年度発刊に向けて準備)

⑦その他 (未来共創センターの共催等)

・大阪大学東アジアセンター国際開発セミナーシリーズ (講師：中尾武彦アジア開発銀行総裁)
(5月24日)

・大阪大学老年学研究会 (講師：ピーター・マーチン教授：アイオワ州立大学) (7月20日)

・第7回SDP研究会 (開発と平和のためのスポーツ研究会) (講師：向山昌利氏：びわこ学院大学) (12月9日)

・阪大フェスタ (3月23日、ヒルトン大阪) ポスター掲示 30名・プレゼンテーション 13名
学生支援室によるポスター発表と学生3名による発表 「しあわせを人間科学する」

1 人間科学セミナー

○第1回人間科学セミナー

『「かわいい」の実験心理学 ―素朴な興味を研究に、そして社会へ―』

講 演 者：入戸野 宏 教授（人間行動学講座 基礎心理学研究分野）

日 時：2016 年 5 月 26 日（木）16：00～

場 所：東館 207 講義室(ユメヌ)

参加者数：62 名

【概 要】

現在、日本のポップカルチャーの代表として「かわいい」が注目されている。しかし、「かわいい」とは何か、「かわいい」と何がよいのか（悪いのか）はあまり理解されていない。本セミナーでは、このテーマに実験心理学・行動科学の立場から取り組んだ研究について紹介した。最初に、「かわいい」に関連した国内外の状況について述べた後、「かわいい」という語の歴史を概観した。次に、かわいさと幼さの関係、さまざまな対象に感じるかわいさに共通する心理要因、かわいいと感じることで生じる行動傾向などについて論じた。また、2014 年から中国経済産業局が主催する「カワいいモノ研究会」という産官学の取り組みについても紹介した。最後に、フロアを交えた活発なディスカッションを行った。

【講演者紹介】

1971 年横浜生まれ。1993 年に大阪大学人間科学部を卒業後、同大学院に進学。1998 年に博士後期課程を修了し、博士（人間科学）を取得。同年 4 月より、広島大学総合科学部助手。同大学院准教授を経て、2016 年 4 月より現職。専門は、実験心理学。特に、人間の心を主観－行動－生理の 3 側面から測定する心理生理学と、人間と人工物（モノやメディア）との関係を探る工学心理学を得意とする。

○第2回人間科学セミナー

『共生社会の構築に向けたアクションリサーチ』

講演者：稲場 圭信 教授（未来共生学講座・共生社会論）

日時：2016年7月21日（木）16：00～

場所：東館 207 講義室(ユメヌ)

参加者数：62 名

【概 要】

近年の新自由主義、過剰に「自己責任」を問う社会にあって、「生きづらさ」に向き合い、支え合い、共に生きる「共生社会」への希求もあります。私は、宗教的利他主義・社会貢献、寺院や神社の避難所といった、あまり社会認知されていない領域で「共生社会」のあり方を探究してきました。今、それが重要となりつつあります。本セミナーでは、利他主義とソーシャル・キャピタルとしての宗教をテーマに、社会に関わるその研究実践を問い直しました。

上記のような研究実践は、価値判断を伴うものです。自らの立ち位置を自覚しながら、研究者が、よりよき社会の構築につながる可能性のある研究実践を自覚的に行うことが重要です。場合によっては現場を混乱させ、被害を生み出す危険性もあることを自覚しながら現場の実践に参画し、たえず自分の関わりを顧みる再帰的な取り組みが、共生社会の構築につながるアクションリサーチなのです。

【講演者紹介】

大阪大学大学院教授（人間科学研究科未来共生学講座共生社会論）。「宗教者災害支援連絡会」世話人。東京大学卒業、ロンドン大学大学院博士課程修了。博士（宗教社会学）。専門は宗教社会学、利他主義、ソーシャル・キャピタルとしての宗教、防災と宗教。「未来共生災害救援マップ」運営。著書に『利他主義と宗教』（弘文堂、2011年）、『思いやり格差が日本をダメにする』（NHK出版、2008年）、『社会貢献する宗教』（共著：世界思想社、2009年）、『震災復興と宗教』（共著：明石書店、2013年）、『震災支援ハンドブック』（共著：春秋社、2016年）など多数。

○第3回人間科学セミナー

『Thinking the Earth: New Disciplinary Alliances in the Anthropocene』
(地球を考える：「人新世」における新しい学問分野の連携に向けて)

講 演 者：Casper Bruun Jensen 特任准教授

日 時：2016 年 10 月 27 日（木） 16：00～

場 所：東館 207 講義室(ユメヌ)

参加者数：39 名

【概 要】

The earth has crossed several thresholds thought to maintain global ecological stability; if this process does not stop soon, earth systems may spin into positive feedback loops with unpredictable and likely catastrophic outcomes. Defined as a the period where humans began leaving measurable marks in geological strata, and connected with global warming and climate change, this new era is referred to as the anthropocene. Having simultaneously entered natural science, social science and public discourses, the anthropocene increasingly shows up in both within from geology and marine biology to literary theory and anthropology and on to anthropocene arts and climate fiction. Given the variability and magnitude of the challenges named by the term, it is increasingly recognized that addressed that they will need new alliances of thinking that do not respond to compartmentalized disciplines. At issue is nothing less than what some have called the need to ‘think the new earth.’ In this paper, I discuss the challenges and opportunities for social science and the humanities in light of these anthropocene transformations.

【講演者紹介】

2016 年 2 月から大阪大学大学院人間科学研究科特任准教授

○第4回人間科学セミナー

『不可視のリスクに起因する不安のコミュニケーションをどう捉えるべきかーリスク社会における課題と未来への展望ー』

講 演 者：三好 恵真子 教授（人間行動学講座 環境行動学分野）

日 時：2016 年 11 月 17 日（木） 15：00～

場 所：東館 207 講義室(ユメヌ)

参加者数：33 名

【概 要】

事故や公害被害等の負の帰結に対し、これまでの産業社会において想定されてきたリスクは、「望ましくない事象の発生確率×予測される損害規模」と定義された。つまりこの解釈は計算や予測が可能な「客観主義的リスク観」と捉えることができ、それゆえにリスクは知の増大や科学技術の進歩によって未然に防止できるもの、やがては克服されるべきものと見なされたのである。しかしながら原子力発電所の事故や種々の環境問題、さらには食品汚染、薬害、新型感染症など、20 世紀後半以降から我々が直面することになった「新たなリスク」の諸種は、計算し得ない「不確実性」をはらんでおり、また未来は知り得ないという「非知」の問題とも交錯し合うようになった。今回のセミナーでは、アスベスト災害の特殊な事例を紹介しながら、被影響者から表明される「不安のコミュニケーション」の意義を環境学の視点から再確認した。最後に課題解決への学際的アプローチや人間科学としての協働について、白熱する議論が交わされた。

【講演者紹介】

1996 年大阪市立大学博士後期課程修了。博士（学術）。東京農業大学助手、大阪外国語大学外国語学部国際文化学科講師、同准教授、本研究科准教授を経て、2016 年 5 月より現職。専門は、食物物性学、人間環境論。食品・医療分野などの応用開発に直結する基礎研究を基にした種々の産官学共同研究の実績を持つ。また都市鉱山開発などリサイクル技術開発等を手がける他、東アジアの環境問題を巡る実践的地域研究に取り組んでいる。研究室には、適正技術を開発する理工系の研究者から海外での現地調査を重ねる研究者まで文理を問わず多様な人材が集結するユニークな研究環境を構築している。

○第5回人間科学セミナー

『The Evolution of Coordination～調整の進化～』

講演者：Sarah F. Brosnan（ジョージア州立大学 心理・哲学・神経科学部門 准教授）

日時：2016年12月5日（月） 16：30～

場所：北館ラーニングコモンズ

参加者数：57名

【概要】

Humans routinely confront situations that require coordination between individuals, from mundane activities such as planning where to go for dinner to incredibly complicated activities, such as international agreements. How did this ability arise, and what prevents success in those situations in which it breaks down? To understand how this capability has evolved, my lab uses the methodology of experimental economics to address these questions in a cross-species fashion. Experimental economics is an ideal mechanism for this approach, as it is a well-developed methodology for distilling complex decision-making into a series of simple decision choices, allowing these decisions to be compared across species and contexts. We have used this approach to investigate coordination and anti-coordination in New World monkeys, Old World monkeys, and great apes, including humans, using identical methodologies. We find that there are remarkable continuities of outcome across the primates, including humans; all species are able to coordinate and, to our surprise, in at least some circumstances, all species were able to find the Nash Equilibrium in an anti-coordination game. On the other hand, there are also differences in outcomes across the primates, and studies using simulated opponents indicate that even when the same outcome is reached, there are important differences in the mechanisms each species uses to reach these outcomes. I consider both the similarities and differences and what these can tell us about the evolution of coordination across the primates.

○第6回人間科学セミナー

『行動生理学とともに』～最終講義～

講演者：志村 剛 教授（行動生態学講座 行動生理学分野）

日時：2017年2月15日（水）13：00～14：30

場所：本館51講義室（キャノピーホール）

参加者数：66名



【概要】

1972（昭和47）年、新設された大阪大学人間科学部に1期生として入学し、2年後に行動生理学講座に籍を置くようになってから、はや40年余りが過ぎました。本講義では、創設当時の人科や行動生理学の様子を簡単に紹介した後、私が行動生理学教室で関わってきた研究の概要を辿ってみました。大学院生の頃は、ラットの誘発電位を指標として学習の脳機構を探る試みをしていましたが、助手に採用されてからは、自由行動中の脳局所ニューロン活動の記録技術を工夫し、当時漸く実用化されつつあったビデオ画像記録とパソコン処理システムを導入して、生殖行動と単一ニューロン活動の相関を捉えることに成功しました。米国への1年間の留学を契機に味覚関連行動の脳機序の解明にテーマを移し、局所破壊、ニューロン活動記録、微小透析、行動薬理、神経解剖などさまざまな手法を用いて、情動性味覚情報処理機構を明らかにしてきました。『人家無き千里は遠し人科かな』という人科新設当時と比べると、吹田キャンパスの状況は一変しましたが、この間多くの方々に支えられて行動生理一筋に歩めたことは、とても幸運だったと思います。

【講演者紹介】

1976年 大阪大学人間科学部卒業、1980年 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程退学、同年 大阪大学人間科学部助手、1991～92年 米国ペンシルバニア州立大学研究員、1995年 大阪大学人間科学部講師、2000年 大阪大学大学院人間科学研究科助教授、2007年 大阪大学大学院人間科学研究科教授。主な共著書 『The Senses: A Comprehensive Reference, Vol. 4, Olfaction & Taste』（Academic Press、2008年）、『新・行動と脳』（大阪大学出版会、2007年）、『味のなんでも小事典』（講談社、2004年）、『食行動の心理学』（培風館、1997年）、『脳—可塑性研究の進歩』（朝倉書店、1990年）。

○第7回人間科学セミナー

『だれひとり取り残さない国際保健医療をめざして』～最終講義～

講演者：中村 安秀 教授（グローバル共生学講座 国際協力学分野）

日時：2017年2月17日（金）15：30～17：00

場所：コンベンションセンターMOホール

参加者数：約200名



【概要】

2015年9月国連総会において「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択され、その理念として「だれひとり取り残さない（no one left behind）」ことが宣言された。私自身は30年前に電気も水道もないインドネシアの村でプライマリ・ヘルスケアを学び、日本が貧しかった1948年に世界で初めて作った母子手帳を世界に普及するなかで先進国や途上国を問わず共に実践活動を行い、共同研究の成果を発表してきた。グローバルな国際協力の営みのなかで日本自身も途上国から積極的に学ぶ必要があることを強調したい。最終講義では、人間科学研究科の関係者や卒業生だけでなく、国際保健医療や国際協力に関連する方々が全国から集まり、ホットな情報交換の場が醸成されたことは望外の喜びであった。

【講演者紹介】

大阪府立天王寺高校卒業後、1977年東京大学医学部卒業。小児科医。都立病院小児科、保健所勤務などを経験し、その後国際協力機構（インドネシア）、国連難民高等弁務官事務所（アフガニスタン難民医療）など途上国の保健医療活動に取り組む。東京大学小児科講師、ハーバード大学公衆衛生大学院研究員などを経て、大阪大学大学院人間科学研究科教授。日本国際保健医療学会理事長、国際ボランティア学会会長など、学際的な視点から市民社会に役立つ研究や教育に携わる。国際保健、在住外国人の保健医療、災害保健医療など関心の幅は広いが、どこの国にいても子どもがいちばん好き。

○第8回人間科学セミナー

『第二の近代における社会学理論の可能性』～最終講義～

講演者：友枝 敏雄 教授（社会環境学講座 社会学理論分野）

日時：2017年3月8日（水）15：00～16：30

場所：本館51講義室（キャノピーホール）

参加者数：116名



【概要】

理論研究と計量研究という「二足の草鞋」を履いてスタートした社会学研究者としての若い頃のエピソードを紹介した後、この最終講義では、理論研究についてお話しました。

社会学の定義には、次の二つがあります。第一の定義は、「近代の自己認識の学問」と言われるものであり、第二の定義は、「私と他者との関係として成立した社会もしくは社会現象を研究対象とする学問」というものです。以上二つの定義をふまえて、「第二の近代」と言われる20世紀後半以降における社会学理論の可能性として、公共性(publicness)と正義(justice)という二つの概念が重要であることを指摘しました。公共性は、社会学的研究のメインテーマである「社会的なるもの (the social)」を考察する際の端緒となります。また正義は、社会秩序が規範性を有することの中核にあるものです。正義については、かのロールズの『正義論』の意義と問題点を論じた後、「ケアされる関係」から出発する正義論もしくは「圧倒的な非対称」から出発する正義論によって、いかなる社会が構想されるかについて、私なりの考えを展開してみました。

講義の最後に、コンポジウムの一環として、千葉泉先生（スペイン語、南米文化の研究が専門）のギター伴奏で、ドイツ語の曲3曲とイタリア語の曲1曲を独唱しました。千葉先生の名伴奏のおかげで、聴衆の方々との一体感のある演奏のひとつとなりました。

【講演者紹介】

1951年熊本市生まれ、1970年私立修道高等学校卒業、1975年東京大学文学部社会学科卒業、1979年4月東京大学大学院社会学研究科博士課程中退、1979年5月東京大学文学部助手、1984年4月中央大学文学部専任講師、1987年4月九州大学文学部助教授、1996年9月九州大学文学部教授を経て、2006年4月より大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は、社会学理論・社会学説史の研究と社会調査データの計量分析。主な著書は、『モダンの終焉と秩序形成』（有斐閣、1998年）、『リスク社会を生きる若者たち』（編著：大阪大学出版会、2015年）、『社会学のエッセンス 新版補訂版』（共著：有斐閣、2017年）、『社会学の力』（共編著：有斐閣、2017年）。

2 ランチトーク

○第1回 ランチトーク

「自分の死を考えることで、よりよく生きる」

講演者：田中 和輝（臨床教育学講座 臨床心理学研究分野 博士前期課程1年）

日時：2016年7月20日（水）12：10～13：00

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：18名

【概要】

「自分がいずれ死んでしまう」というのが私の関心ごとであり、一度他の学生が、どんな風に「死」を捉えるか聞いてみたい、というのが今回ランチトークで発表するに至った動機である。修士論文に向けて自分の中での概念整理をしたいという意味合いもあった。発表は主に、存在脅威管理理論という私の関心のある理論の概説と展望、そして死を踏まえた上で「よりよく生きる」の「よく」が意味するものとは何か、という議論が中心であった。感想としては、他分野からのコメントは、やはりお互い、思考する文脈が違い、使う用語も違うというのが率直な印象だ。自分の専門性を知らない人にもわかるように伝え、やりとりするのがいかに難しく大切な、というのを痛感した。また想像した以上に、多くの方に聞きに来て頂けて非常にありがたく良い経験になった。

○第2回 ランチ・トーク

哲学カフェ「人間科学の存在意義」

講演者（※進行役）：内田 桃子（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程1年）

日時：2016年10月26日（水）12：10～12：55

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：18名

【概要】

今回は講演者を設けず、参加者全員で哲学カフェを行いました。私は進行役を任せていただき、さまざまな角度から繰り出される意見の交通整理に努めたつもりです。その経験から、ふと思いついたことがあります。それは、「今私たちが立っているこの場こそ、人間科学と呼ぶに相応しいのではないか」ということです。

人間科学研究科のオリジナリティのひとつは、隣の研究室の人間が自分とは全く違う研究をしているというところでしょう。私たちは日々、異分野の研究者と顔を合わせており、その気にな

ればいつでも刺激に満ちた議論を始められる環境にあるのです。

ランチ・トークがそのための場を提供できる、と考えるのは傲慢でしょうか。昼休み、弁当片手に本館1階へ集まるのは、それほど労力を必要としません。まだまだ始まったばかりの企画ですが、こうした「ゆるい」集会を開催し続けることで「学際的」交流がより気軽に感じられるようになれば、という願いを胸に、これからも運営に携わっていきたいと思います。

○第3回 ランチトーク

「ゲームと教育」

講演者：今村 理恵（臨床教育学講座 教育工学研究分野 博士前期課程2年）

日時：2016年11月9日（水）12：10～13：00

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：10名

【概要】

修士論文『「物理基礎」学習のための脱出ゲームアプリの開発』の内容を、本研究で開発したアプリを実際に触ってもらいながら紹介した。その上で、デジタルゲームの教育利用における可能性や、アプリに関する意見・感想について話し合った。議論では、ゲームに対する価値観や、ゲームで学んだ経験、アプリの改善案などが話題に上がった。一般にゲームに否定的な意見が多い中、生産的な議論をすることができた。また、他研究科の方からのご指摘が、私にはなかった視点であったので、研究上非常に参考になった。様々な分野の方々と交流できる機会は特に大学院に上がってからは少なくなりがちなので、こういった機会が重要であるし、もっと増やすべきだと感じた。

○第4回 ランチトーク

「形而上学と科学の関係」

講演者：雪本 泰司（基礎人間学講座 科学哲学研究分野 博士後期課程1年）

日時：2016年11月30日（水）12：10～13：00

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：16名

【概要】

「形而上学と科学の違い」と「形而上学と疑似科学の類似性」を紹介し、形而上学の意義を検討した。批判的な自然科学者を想定し、分野を擁護するつもりであったが、聴衆は寛容

であった印象がある。それゆえ擁護は諦め、真の問題を共有するため、代用の利かない形而上学特有の役割がいかに無いのかという説明に専念した。終了後にもコメントをくださった方々からは、習わずとも人は形而上学的な考えに至るのだということを感じさせられた。形而上学が大学で授業される価値はあるのかという疑問がますます深まる素晴らしい機会をいただいたことに感謝を申し上げる。なぜこんなものが（不）必要なのか、これからも考え続けたい。

○第5回 ランチトーク

「教育に『音楽制作』を取り入れる意義」

講演者：金井 宏築（臨床教育学講座 教育工学研究分野 学部4年）

日時：2016年12月7日（水）12：10～13：00

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：10名

【概要】

第5回ランチトークでは、私の楽曲制作やレーベル活動の経験をもとに、「教育に音楽制作を取り入れる」ことについて話題を提供した。導入部分では絵を描くことと音楽を制作することを比較しつつ、なぜ絵などに比べて音楽の制作人口が少ないかを説明した。また実際に私が制作した楽曲を披露し、どんな情景が思い浮かんだかなどに着目して鑑賞してもらい、音楽制作の敷居の高さを感じてもらった。最後に自身の楽曲制作の活動によって何が変わったかなどを話し、教育における有用性や、それを取り入れるにはどうすべきかを話し合った。私は楽曲制作が実践されていない理由は主にコストの問題だと考えていたが、ある程度整った環境で課題曲の完成や技術の向上を目指す教育よりも、何も与えないほうが創作に組みやすいのではないかという意見もあった。今後の教育において、創作の体験の機会をより開かれたものにするには何が課題であるかを考えていきたい。

○第6回 ランチトーク

哲学カフェ「人間科学はだれのためになっていないのか」

講演者（※進行役）：内田 桃子（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程1年）

日時：2016年12月14日（水）12：10～12：55

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：13名

【概 要】

今回は第2回の続編である。第2回「人間科学の存在意義」では、人間科学の暴力性、すなわち人間科学が誰を傷つけているのかについて対話がなされた。今回はその際議論し尽くせなかったことを引き続き対話するために、「誰のためになっていないのか」という視点で改めて話し合った。

対話の深まり以上に印象的だったのは、学生でなく職員の方からも発言があったことである。インターナショナルカフェは共用スペースであるため、ランチ・トークに参加する意志のない人も同じ空間で思い思いに過ごしている。今回発言してくださった職員の方も、ランチ・トークに参加するためではなく、昼食を取るためにインターナショナルカフェにいた。私たちの位置から離れた所に席を取りつつ、聞くとはなしに聞いていたところ、ふと発言したくなったようだ。

これはランチ・トークのひとつの「理想的」な姿であると私は考える。第一に、参加/不参加の二項対立ではなく、「聞くとはなしに聞いている」人の存在を許容する空間であること。第二に、学生/教員/職員という垣根を取り払った対話ができること。今回職員の方が発言してくださったことで、これら二点が同時に達成された。今学期のランチ・トークでこうしたシーンが見られたのは残念ながら今回だけであったが、来学期ではもっと学生以外の方の参加が増えるよう、参加しやすい空間作りに努めたい。

○第7回 ランチトーク

「なぜ通信制・定時制課程から全日制課程へ転編入学できないのか」

講 演 者：片田 真之輔（教育環境学講座 生涯教育学分野 博士前期課程2年）

日 時：2016年12月21日（水）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：10名

【概 要】

修士論文の内容をわかりやすく発表を行った。本研究では、高等学校の課程間における転編入学を行う際に生じる諸問題を明らかにする。具体的には、現代の後期中等教育で論じられて来なかった通信制・定時制課程から全日制課程へ転編入学を希望するという課題に、どのような問題があり困難とされているのか、また何を根拠として現在まで課程間移動が「ないもの」とされてきたのかを明らかにしたい。この「ないもの」とされてきた背景には、例えば、①通信制・定時制課程と全日制課程は、違った学校形態（一条校）の「転編入学」は行うことができない、②一度決めた高校や何かしらの事情から進学した高校を変更することは許されない、③そもそも課程間移動の転編入学は想定されない、といったことがあげられる。加えて、今日に至るまでの制度と歴史を振り返り、学校関係者たちがどのように転編入

学を運営してきたのかを手がかりにすることで、本研究に対する現状と課題を論じる。

○第8回 ランチトーク

「オンラインで学習する意義 良く学ぶための方法」

講演者：勝見 世界（臨床教育学講座 教育工学研究分野 博士前期課程2年）

日時：2017年1月18日（水）12：10～13：00

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：6名

【概要】

発表者の勝見から自身がスタッフとして制作に携わり、修士論文の分析対象ともなった、「遠隔学習サービス(MOOC)」についての概要説明と利用状況等についての発表があった。大阪大学も参加する MOOC は様々な大学の授業がオンラインで、基本的に無料で受けられ、希望者には有償で修了証が発行されるサービスであるという。

参加者からは「学習サービスについて初めて知った」「現状では限られた人しか利用できないかもしれないが、例えば日本やアメリカなどの VISA の取得や渡航が難しい国の人たちがもっと利用できると良くなるのではないか」などの肯定的な意見が出た。一方で、修了証が現段階ではそれほど有効ではないことや、現段階では教育が受けられない人の学習保証ではなく、すでに教育を受けている人のさらなるステップアップとして機能しているに過ぎないといった課題も共有された。

ネットワーク、テクノロジーと教育の関係を考える上で、専門外の参加者にとってもとても有意義な機会となった。

（文責：桂 悠介）



3 冊子『私の一冊』の作成と配付

ー1年生必修科目『人間科学概論』教材としてー

2016年4月の人間科学研究科の改組に伴い、学部1、2年生の必修科目、選択必修科目の見直しが行われた。その結果、各学科目が提供していた1年生の前期の必修科目である『人間科学概論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』の4科目が、『人間科学概論』の1科目に統合された。新しく設置された『人間科学概論』の目的は、「初年次学生が人間科学とはどのような学問で、どのように学ぶのか、あるいは、どのような課題に、どのように取り組むのかなどについて、双方向・参加型の授業やグループ討議などを通して学ぶこと」である。

2016年の前期に開講された本科目の授業では、世話人教員として中道が、さらに、森川教授、山中教授、檜垣教授、岡部准教授、岡田准教授も加わり、学生が人間科学部の学際性を体感しながら、人間科学の歴史、研究倫理なども学び、考え、意見を交える授業展開を目指した。大学院生20余名が参加して、小グループになった1年生に、研究活動などを伝え、1年生も質問する機会を設けた。学生には4回のレポート提出を課し、全ての教員が分担してコメントをつけて、返却した。

『人間科学概論』のこのような新しい授業取組の一つとして、『私の一冊』を組み入れた。人間科学研究科専任教員に、1年生に読んでほしい本1冊とその本の内容、なぜ読んでほしいのかなどを1000字ほどで書いていただいた。70人の教員から文章を提出していただくことができ、1冊の冊子にまとめて、『人間科学概論』の受講生に配付した。受講生には冊子に紹介されている本を1冊読み、グループ内での内容紹介とともに、書評としてレポート提出を求めた。『私の一冊』に紹介された本のほとんどが、受講生140余名の誰かが読むこととなり、この事実は、紹介された本が広範な分野におよんでいるだけでなく、人間科学部学生の関心の幅広さを示唆している。さらに、『私の一冊』を読むことによって、「入学時に考えていた希望分野だけでなく、他の研究領域にも関心が広がった」などの学生の感想が届いた。

尚、冊子『私の一冊』を学部2年生、大学院人間科学研究科博士前期課程1年生にも配付した。人間科学部への学部訪問してきた教員、高校生、出張授業で訪れた高校の教員、生徒にも適宜配付した。『私の一冊』が人間科学部の学部紹介としても有用であることも確認できた。

(文責 中道 正之)



4 高大連携

未来共創センターで対応した高等学校での出張授業、高校生の研究室訪問等は8校で、合計約850名の高校生を対象とした活動を実施した。さらに、6校の中学校に対して、出張授業、研究室訪問等を行った。1校の小学校でも出張授業を実施した。出張授業、研究室訪問等では、教員が主に対応したが、同時に、学部生、大学院生も参加した。

参加した学生たちには、教員の模擬授業や研究紹介の合間に、学生生活や研究内容を高校生や小中学生にわかりやすく伝えることを求めた。学生からは、「5分から15分ほどのわずかな発表の時間であっても、事前準備やその場での対応力の重要さを実感した」などの報告を得た。このことは、「高大連携」を大学から高校等への一方向の情報提供とするだけでなく、学生教育の場ととらえることが可能であることを示唆している。

なお、未来共創センターが関わった下記の「高大連携」以外にも、人間科学研究科教員が個別に高校等での出張授業、研究室訪問に対応していることも付記する。

・16回実施（センターに連絡があったもの）

- 5月31日 関西大倉高校1、2年75名、出張授業（中道 正之 教授・院生1名・学部生1名）
- 7月27日 岡山県立岡山一宮高校1年生70名、サルの観察学習 出張授業（中道 正之 教授）
- 8月10日 香川県立観音寺第一高校ほか、研究室訪問（中野 良彦 准教授）
- 8月30日 仁川中学校 特進Ⅱコース 15名、研究室訪問
（篠原 一光 教授・前馬 優策 講師・森泉 慎吾 助教・紀ノ定 保礼 助教）
- 10月31日 明星高校 出張授業、（稲場 圭信 教授・院生2名）
- 11月18日 香川県立高松北高校 2年生23名、出張授業（入戸野 宏 教授・院生1名）
- 11月24日 国立大阪教育大学平野高校 30名、研究室訪問（篠原 一光 教授・紀ノ定 保礼 助教・管生 聖子 助教・院生3名）
- 12月9日 洲本市立洲本第2小学校2、3年生40名、出張授業（中道 正之 教授・学部生2名）
- 12月13日 京都市立近衛中学校2年生、講演（孫 美幸 講師）
- 1月6日 岡山県立勝山高校1、2年生20名、出張授業（中道 正之 教授・学部生1名）
- 1月13日 京都市立勧修中学校1年生、出張授業（孫 美幸 講師・学部生1名）
- 2月2日 京都市立勧修中学校3年生、講演（孫 美幸 講師）
- 2月8日 京都市立朱雀中学校2年生、出張授業（孫 美幸 講師・院生2名）
- 2月10日 高松市立高松第一高等学校 自然科学講演会1、2年600名、出張授業（中道 正之 教授・院生2名）
- 2月10日 京都市立朱雀中学校1年生、出張授業（孫 美幸 講師・学部生1名）
- 3月3日 京都市立勧修中学校1年生、出張授業（孫 美幸 講師・院生3名）

5 市民公開講座

○第1回市民公開講座 「想いをはせる」

【講演】

『「ありがとう」が社会を安全にする？－感謝と禁止のメッセージが違反抑止に及ぼす影響－』

臼井 伸之介 教授（人間行動学講座 安全行動学研究分野）

『学歴分断社会から学歴共生社会へ』

吉川 徹 教授（社会環境学講座 社会データ科学研究分野）

『コンポジウム「想いをはせる」』

千葉 泉 教授（未来共生学講座 共生社会論研究分野）

岡部 美香 准教授（臨床教育学講座 教育人間学研究分野）

ゲスト：山中 浩司 教授（社会環境学講座 文化社会学研究分野）

日 時：2017年3月11日（土）13：30～

場 所：本館51講義室（キャノピーホール）

参加者数：66名

【概要】

○「ありがとう」が社会を安全にする？－感謝と禁止のメッセージが違反抑止に及ぼす影響－
（臼井 伸之介 教授）

私たちの日常生活では、交通事故に代表されるように種々リスクが存在します。そのため、常日頃からルールを守ることが求められます。そこで街では駐車禁止のような「〇〇禁止」の表現が多く使われます。一方で「きれいなご使用ありがとうございます」という「感謝」の表現を目にすることもあります。講演ではこのようなメッセージ表現の違いがわれわれのルール遵守に及ぼす影響について、演者らが行ったドライビングシミュレータを用いた実験についてお話をしました。実験の結果、禁止表現の繰り返し提示は違反を誘発する一方で、感謝表現は違反の抑止にある程度有効であることなどを解説しました。講演後、皆さまからは「安全の新しい切り口として現場に活かせる」「実社会に通じるのか疑問だ」など肯定・否定様々な意見が寄せられました。社会の安全は私たちの永遠のテーマでもあり、このような話題提供が市民の安全を考えるきっかけになればと切に思いました。

○学歴分断社会から学歴共生社会へ（吉川 徹 教授）

日本の成人の何%が大卒層で、何%が非大卒層であるか知っていますか？また、あなたがこの数日のうちに会話をした家族、友人、知人を思い浮かべたとき、ほとんどが自分と同じ学歴だということはありますか？いま、大卒層のライフ(人生=生活)と非大卒層のライフ(人生=生活)の交わりが減っていき、お互いの姿がよくわからなくなりつつあります。

今回はこの学歴分断が親子の世代を超えて再生産している日本社会の深刻な実態を、社会

調査データに基づいて解説しました。この実態を改善するには、わたしたちの考え方や社会の見方を根本的に変えることが求められます。もしあなたが大学進学していなければ、いったいどうなっていたのでしょうか？この講座を、わたしたちの社会を支える「もう一人の自分」に思いをはせるきっかけにさせていただこうと、お話をさせていただきました。

私の講演の内容をよく理解していただき、いろいろな人生、いろいろな経験をされた方から、それぞれの学歴観について、ご意見を伺うことができました。こちらの熱意を上回る強い思いに触れることができたことを、たいへんありがたく思っています。

○コンポジウム「想いをはせる」(千葉 泉 教授・岡部 美香 准教授・ゲスト：山中 浩司 教授)

フロア参加型のこのコンポジウムでは、まずフロアのみなさまに5～8名ずつのグループになっていただき、ある外国の歌を生演奏で聴いていただきました。そして、その歌がどのような状況のなかで誰から誰へのメッセージを歌ったものだと思うか、をグループで話し合っていました。その後、歌詞を配布し、千葉と岡部から、歌の文化的・社会的背景と人間どうしのコミュニケーションのあり様に関する説明をいたしました。最後に、講演者・参加者全員で、東日本大震災の被災地・被災者に想いをはせ、千葉が創作した復興応援歌「それでも桜は咲く」を合唱・合奏いたしました。フロアのみなさまは、参加型という形式に最初は戸惑っておられたようですが、最後には相互に打ち解け、話し合いや歌を楽しんでくださいました。ただ、受動的に話を聴くだけに留まらないこの形式が、研究者の感性とともに、人々の市民性を育むことを期して、今後もコンポジウムの活動を継続していきたいと思います。

○茶 話 会

時 間：16：00～17：00

場 所：本館インターナショナルカフェ

参加者数：30 名

講演終了後、講演者、来場された方々、学生、スタッフと軽食を囲みながら歓談の場をもち、直接交流する機会をつくった。

【講演者紹介】

臼井 伸之介 教授：専門は産業心理学・人間工学。日常生活や産業場面でのヒューマンエラー、事故防止の心理学研究を行っている。

吉川 徹 教授：学歴社会と日本人の社会意識について社会調査データから明らかにしています。

千葉 泉 教授：専門はラテンアメリカ地域研究とその実践的応用。「自分らしさ活用」の観点から、共生的な社会を実現する方法について、音楽や語り合いの実践を通じて研究している。

岡部 美香 准教授：専門は教育人間学、教育思想史。人間が「生き生きと」生きるには、他の人間や人間以外の存在といかにかわるか、を人間学的・思想的・民俗学的に研究している。



○第1回 阪大人科サイエンスカフェ

「21世紀の子どもたちの行方」

講 演 者：山中 浩司（大阪大学大学院人間科学研究科教授：社会環境学講座 文化社会学研究分野）

古川 岳志（大阪大学非常勤講師）

日 時：2017年1月29日（日）14：00～16：00

場 所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：12名

【概 要】

日本は女性の社会進出が非常に遅れていると言われています。世界経済フォーラムで報告された世界の男女平等報告書では、世界144カ国中なんと111位です。知らぬ間に日本は世界でもまれにみる特殊な国になってしまいました。今ある職業の半数近くが消滅すると言われる21世紀に日本の男子と女子はどうなるのでしょうか。世界的にみると実は問題は女子ではなくて・・・。

【講演者紹介】

山中 浩司 教授

大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は医療社会学、科学社会学。ここ7年ほど「生き方死に方を考える社会フォーラム」（<http://ikikata-forum.com/>）を不定期に開催して、高齢社会と終末期医療、男性問題などを一般の方といっしょに議論しています。

古川 岳志 氏

大阪大学非常勤講師。専門は文化社会学、スポーツ社会学。「高齢男性のたまり場」である競輪場でフィールドワークを続けている。「生き方死に方を考える社会フォーラム」の中心メンバーの一人。



7 コンポジウム

○中学生サマー・セミナー「音で学問してみよう」

講 演 者：千葉 泉 教授（未来共生学講座・共生社会論研究分野）

岡部 美香 准教授（臨床教育学講座・教育人間学研究分野）

日 時：2016 年 7 月 23 日（土）10：00～12：00

2016 年 8 月 6 日（土）13：30～15：30

場 所：本館 インターナショナルカフェ

参加者数：24 名（大阪府下の中学生（7 月 23 日、8 名・8 月 6 日、16 名））

【概 要】

大阪府教育委員会が毎年、実施している中学生向けサマー・セミナーに講座を 2 つ提供した。いずれも、外国の民謡を楽しみながら、言葉と言葉以外の音色やリズムがもつコミュニケーション力の謎に迫るというコンポジウムである。コンポジウムとは、音楽を楽しむコンサートと講話・議論を主とするシンポジウムを組み合わせたプログラムを意味している。当日は、簡単なアイス・ブレイキングの後、参加者に、まずは、何の前情報も前理解もないままにチリの民謡の生演奏を聴いてもらい、その世界に想いをはせてもらった。その後、民謡の説明とそれにまつわる講話を聴いて、参加者どうしでコメントや感想を述べあってもらい、人間どうしのコミュニケーションの多層性、多元性について考えてもらった。参加者からは、「自分のコミュニケーションを見直すよい機会になった」、「言葉にはさまざまな力があることがわかった」、など好意的・肯定的な評価が多数寄せられた。

【講演者紹介】

千葉 泉 教授

大阪大学人間科学研究科教授。1959 年愛知県生まれ。東京外国語大学卒業後、東京大学大学院修士課程修了。専門は、ラテンアメリカ地域研究とその実践的応用。著書として、『「自分らしさ」をこころの中心に』（単著：多文化共生を考える会、2014 年）、『国際理解に役立つ世界の民族音楽、6：南・北アメリカの音楽』（単著：ポプラ社、2003 年）、『馬に乗ったマプーチェの神々―チリ先住民社会の変遷―』（単著：大阪外国語大学学術双書 19 号、1998 年）など。

岡部 美香 准教授

大阪大学人間科学研究科准教授。1970 年大阪府生まれ。大阪大学卒業、大阪大学大学院博士課程修了。博士(人間科学)専門は、教育人間学、教育思想史。著書として、『マナーと作法の人間学』（共著：東信堂、2014 年）、『教員養成を哲学する―教育哲学に何ができるか』（共著：東信堂、2014 年）、『教育人間学―臨床と超越―』（共著：東京大学出版会、2012 年）、『環境教育学―社会的公正と存在の豊かさを求めて―』（共著：法律文化社、2012 年）、『子どもと教育の未来を考える』（編著：北樹出版、2009 年）など。

8 阪大フェスタ

2016年の夏に新しく設立された大阪大学COデザインセンターが、2日にわたるイベントを主催しました。産・官・民・学による連携の深化を図るため、「阪大フェスタ：未来に向けた共創のあり方を考える」と題し、NPOや一般の方、産業界を代表する企業とともに交流を深めました。初開催の阪大フェスタでは、下記5つのセッションを設けました。

- [A] 企業による講演セッション（未来の「デザイン」を考える）
- [B] 企業による人材育成紹介セッション（未来の「働き方」を考える）
- [C] 本学の教員や学生による研究紹介セッション（未来の「問い」を考える）
- [D] 学部・研究科などによる大学活動紹介セッション（未来の「大学」を考える）
- [E] 産学共創ワークショップ（未来の「学び」を考える）

未来共創センターは、上記の中から、「[D] 学部・研究科などによる大学活動紹介セッション（未来の「大学」を考える）」に出展しました。

日 時：2017年3月23日（木）13：30～16：30

場 所：ヒルトン大阪（4階）

ブース展示：「社会とつながる人間科学部」：学生支援室（前馬 優策 講師）

来訪者数：30名

【概 要】

人間科学部の社会貢献活動、未来共創センターの活動、オープンキャンパス、インターンシップ、卒業生の進路を紹介しました。



セミナー：「しあわせを人間科学する ～現役学生による学問体感講座～」：未来共創センター
(孫 美幸 講師・学部生 1 名・院生 2 名)

参加者数：13 名

【概 要】

人間科学部の学生たちが自分の研究テーマについて、高校生や一般の方々にわかりやすく説明しました。学生たちの多様な研究テーマをもとに、会場の方々と一緒に対話する時間をしました。



9 学生の活動と単位化

2016 年度に本センターで活動した学生たちの活動内容に応じて、「人間科学学際実習Ⅰ・Ⅱ」「総合人間科学実習Ⅰ・Ⅱ」「総合人間科学特別実習Ⅰ・Ⅱ」の単位認定を行った。本年度は、3 名が単位申請し、単位を取得することができた。

1. 授業概要

本センターが企画・運営する講座や課外活動等の事業の参加を通して、研究成果の一般社会への還元方法や対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力等の実践的能力を身に付ける。

2. 授業目標

企画力、マネジメント力、発信力、対話力、主体的行動力等を養い、研究や実践活動に応用することができる。

3. 単位認定

(1)～(4)の活動より得られた単位を総計して2 単位以上で、上記科目の単位を認定する。

(1)ランチトークスタッフ（企画力、マネジメント力、対話力、主体的行動力）

2 タームに相当する期間、ランチトークスタッフとして自ら進んで企画・運営に携わる。

企画・運営の方法を説明し、主体的に行動することができる。

認定単位 2

(2)サイエンスカフェ、コンポジウム等のスタッフ（企画力、マネジメント力、発信力、対話力、主体的行動力）

1 回のサイエンスカフェ等のスタッフとして、自ら進んで企画・運営に携わり、報告や討論を行う。

企画・運営の方法を説明し、主体的に行動することができる。必要に応じて自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

認定単位 0.5

(3)小・中・高大連携の活動（企画力、発信力、対話力）

小・中・高校での出前授業等で、自ら企画に関わった1 回の発表を行う。

自ら企画し、自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

認定単位 0.4

(4)発表（発信力、対話力）

出前授業、サイエンスカフェ等で比較的短時間の発表を1 回行う（企画には直接関わらない）。

自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

認定単位 0.3

注1 単位は認定のみで、成績評価はしない。

注2 複数学期にわたって単位を合算することができる。

注3 終了時に報告書、(1)についてはレポートを提出する。

注4 大阪大学から謝金を支給された活動は、単位認定の対象とならない。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 **未来共創センター**